

金春禅竹筆『五音三曲集』における用字法について

宮本淳子

一 はじめに

従来、藤原俊成や定家といった歌人の自筆本を中心にするめられてきた用字法研究であるが、近年になって、中世、近世の様々な平仮名資料が調査報告され、時代的特徴が明らかになりつつある。しかし、中世能楽資料における用字法は管見の限り、未だ扱われることが少なく、書記史研究の裾野を広げる上でも調査を必要とする分野であると考えらえる。

金春禅竹（一四〇五〜一四七一）の平仮名資料における用字法については、表・後藤両氏（一九八〇¹）が世阿弥（一三六三?〜一四四三?）の存疑文書の真蹟を認定する過程で金春禅竹筆『六輪一露秘注』を対象に、字体の考察を行っている。この中で両氏は、世阿弥の三書に現れない字体が十五あることや字体の使用比率について一部指摘している。具体的には、『六輪一露秘注』と『花鏡』（世阿弥自筆か存疑文書であった）とを比較したうえで、両書に共通する九十六字体のうち十五字体（「具」「介」「希」「遣」「寿」「須」「世」「曾」「多」行書体）「登」「耳」「波」「盤」「無」「類」が、世阿弥の三書（『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』『金春大夫宛書状』）には使用されていないと述べる。また、世阿弥が使用していた「丹」が両書に使用されていない点についても指摘し、『花鏡』の筆者を禅竹と認定するに至っている。

稿者は、表・後藤両氏（一九八〇）の先行研究を踏まえ、両氏がふれられなかった点を補うべく、日本語学的視点から史的検証を続けている。拙稿（二〇〇八）では世阿弥筆『花伝第六花修』について纏め、その結果、以下の点が明らかになった。

第一に、世阿弥の用字法は一音一字母（一音に対し一種類の字母が使用）が約半数を占めており、一対一で対応する形で書かれている。先行する用字法研究の報告との比較から、時代的に一音一字母の割合は増加傾向にあるといえ、世阿弥はそうした傾向の延長上に位置づけることができる。

第二に、語の位置によって使用されやすい字母とそうでない字母があるということがいえる。例えば「加」を語頭に、「可」を非語頭に使用されるといった点で、時代的に共通する点も多いが世阿弥は特に顕著な書き分けを行っている。

第三に、第二で述べた語の位置における使用傾向は、一様ではなく、その背景には、複合的要因が考えられる。すなわち、隣接忌避、連接回避、行頭、行末における周辺字母との関係及び読みやすさへの配慮など、様々な要因で語頭専用とも思える字母が非語頭に置かれるといった現象が起きているという点についてふれた。

本稿では、前稿に引き続き、世阿弥の女婿である禅竹が平仮名をどのように使用していたのか、使用の実態を探ることとした。禅竹の伝書は、金春大夫家に伝来、秘蔵されてきたもので、大夫家伝来本のほか、江戸時代、家芸存続のため別家に相伝された転写本が残存している。しかし、それらの多くが明治以後、様々な要因で散逸、移管されることとなる。今回とりあげる禅竹伝書の『五音三曲集』もまた、長く所在不明だった資料の一つで、表・後藤両氏の調査時点では出現していなかった。近年になって発見、平成六年に国文学研究資料館に寄贈された経緯がある。禅竹自筆の第一級資料が揃い、用字実態を初めて明らかにできるという点では、特に研究意義にかなうものといえる。

本稿では、その禅竹の用字法を取り上げて、数種類の字母のうち、どの字母が選択されているか等を、語の位置別（語頭・非語頭・付属語）に分類し、特徴を纏める。また調査で明らかとなった特徴をもとに、禅竹が語そのものをどのようにとらえていたのか考えていきたい。

現在、禅竹自筆本として以下の十五資料が残存しているが、漢字片仮名交じりで書かれたものも多く、平仮名が使用されているのは、ゴチックで示した（一）（二）（三）（四）（六）（七）（八）（十四）に絞られる。

- （一）『五音之次第』（国文学研究資料館蔵 享徳四年（一四五五）奥書）
- （二）『歌舞髓脳記』草稿（国文学研究資料館蔵 康正二年（一四五六）以前か。）
- （三）『五音三曲集』（国文学研究資料館蔵 長祿四年（一四六〇）奥書）
- （四）『六輪一露大意』（宝山寺蔵 長祿から寛正初年頃か。）
- （五）『六輪灌頂秘記』（一六）の紙背に書かれており、寛正六年（一四六五）頃かと推定）
- （六）『六輪一露秘注（寛正本）』（金春宗家蔵 寛正六年（一四六五）奥書）
和歌部分のみ平仮名書き
- （七）『六輪一露秘注（文正本）』（宝山寺蔵 文正元年（一四六六）奥書）
- （八）『至道要抄』（宝山寺蔵 応仁元年（一四六七）頃か。）
- （九）『明宿集』（能楽研究所鴻山文庫蔵 書写年不明。寛正六年頃か。）
- （十）『円満井座系図』（宝山寺蔵 応仁二年前後か。）
- （十一）『猿楽縁起』（宝山寺蔵 応仁二年筆）
- （十二）『浄土教批判』（宝山寺蔵 応仁元年頃かと推定）

(十三) 『作善日記』(能楽研究所蔵 嘉吉元年(一四四一)頃かと推定。(十三)から(十五)は合綴本)

(十四) 『二曲三体人形図』(能楽研究所蔵 嘉吉元年頃か。)

(十五) 『花伝第七別紙口伝』(能楽研究所蔵 嘉吉元年頃か。四葉のみの残欠本)

本稿では主に最もまとまった内容と分量をもつ資料(三)の『五音三曲集』を分析対象とする。

『五音三曲集』は、義父である世阿弥の五音説(祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲)を祖述した禅竹の代表的能楽論の一つであり内容により、大きく二つに分けることができる。

前半では、十九曲の謡曲に対し、世阿弥の五音説に基づき、祝言五・幽玄五・恋慕二・哀傷二・闌曲二の十六項目別に分類を行っている。その内容は、歌論書『三五記』和歌十体に基づいており、『三五記』が挙げる漢詩や和歌を引用しつつ分類、声曲の説明を試みている。

後半(二十四丁以降)は、「皮・肉・骨」の三曲の論が述べられ、前半で挙げられた例曲について節・かかり・文字・息・拍子・声などについて具体的な論を展開、「無味智水之事」など六輪一露説にかかわる言及が続く。

資料の特徴として注目されるのは『五音三曲集』の前半、後半ともに謡曲、歌論書『三五記』をはじめとする他文献、和歌や漢詩からの引用部分が多くを占める点である。こうした引用と記述が交互に繰り返されるといふ資料の性質は、用字法にも何等かの影響を与えている可能性が高い。

二 使用字母について

禅竹自筆『五音三曲集』の総仮名文字数は一〇九二四となっている(但し漢字・踊り字・注記類はこれに含まれない)。また字母の種類は、四十八音九十三種類、一音一字母が十五、一音複数字母が三十三であった。一音に対応す

る形にすると、以下のような結果となった(百分率については、小数点第一位を四捨五入した)。

一音一字母(一音につき字母一種類を使用するもの) 15/48音(31%)

一音二字母(一音につき字母二種類を使用するもの) 24/48音(50%)

一音三字母(一音につき字母三種類を使用するもの) 7/48音(15%)

一音四字母(一音につき字母四種類を使用するもの) 1/48音(2%)

一音五字母(一音につき字母五種類を使用するもの) 1/48音(2%)

その内訳は左記の通りである。

一音一字母(一音につき字母一種類を使用するもの) 15

い(以) え(衣) う(宇) お(於) そ(曾) ち(知) て(天) ぬ(奴)

む(武) め(女) も(毛) ゆ(由) よ(与) ゑ(恵) ん(无)

一音二字母(一音につき字母二種類を使用するもの) 24

あ(安・阿) か(可・加) き(幾・起) く(久・具) こ(己・古) さ(左・佐) し(之・志)

せ(世・勢) た(多・堂) と(止・登) な(奈・那) ね(祢・年) ふ(不・婦) へ(部・遍)

ほ(本・保) ま(末・満) や(也・屋) ら(良・羅) り(利・里) れ(禮・連) ろ(呂・路)

わ(王・和) ゐ(爲・井) を(遠・越)

一音三字母(一音につき字母三種類を使用するもの) 7

す(寸・春・須) つ(川・徒・津) に(尔・仁・二) の(乃・能・農)

ひ(比・飛・日) み(美・三・見) る(留・流・類)

一音四字母（一音につき字母四種類を使用するもの） 1

は（者・八・波・葉）

一音五字母（一音につき字母五種類を使用するもの） 1

け（計・介・遣・氣・希）

以下 禅竹が『五音三曲集』で使用した字母について、世阿弥と比較する形で一覧表に示す。世阿弥の使用字母は、『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』『金春禅竹宛書状』に基づく。○×印は使用字母の有無を示し、網掛が両者の相違部分、数字は用例数を表している。

		世阿弥	禅竹
あ	安	○	○
あ	阿	×	○1
い	以	○	○
う	宇	○	○
え	衣	○	○
お	於	○	○
か	加	○	○
か	可	○	○
き	幾	○	○
き	起	○	○
く	久	○	○
く	具	×	○13
け	計	○	○
け	介	×	○20
け	遣	×	○6
け	氣	○	○
け	希	×	○5
こ	己	○	○
こ	古	○	○
さ	左	○	○
さ	佐	×	○4
し	志	○	○
し	之	○	○
す	寸	○	○
す	須	×	○1
す	春	○	○
せ	世	○	○
せ	勢	×	○1
そ	曾	○	○
そ	楚	○2	×
た	太	○130	×
た	多	○	○
た	堂	○	○
ち	知	○	○
つ	徒	○	○
つ	川	○	○
つ	津	×	○1
て	天	○	○
と	止	○	○
と	登	×	○16
な	奈	○	○
な	那	○	○
に	仁	○	○
に	二	○	○
に	尔	○	○
に	丹	○4	×
ぬ	奴	○	○
ね	祢	○	○
ね	年	○	○

		世阿弥	禅竹
の	乃	○	○
の	能	○	○
の	農	×	○3
は	波	×	○17
は	八	○	○
は	者	○	○
は	葉	○	○
ひ	比	○	○
ひ	飛	×	○11
ひ	日	×	○10
ふ	不	○	○
ふ	婦	○	○
へ	部	○	○
へ	遍	○	○
ほ	保	○	○
ほ	本	○	○
ま	末	○	○
ま	滿	○	○
ま	万	○32	×
み	美	○	○
み	見	○	○
み	三	○	○
む	武	○	○
め	女	○	○
め	免	○6	×
も	毛	○	○
や	也	○	○
や	屋	○	○
ゆ	由	○	○
よ	与	○	○
ら	良	○	○
ら	羅	×	○5
り	利	○	○
り	里	○	○
る	留	○	○
る	流	○	○
る	類	×	○1
れ	禮	○	○
れ	連	○	○
ろ	呂	○	○
ろ	路	○	○
わ	和	○	○
わ	王	○	○
ゐ	爲	○	○
ゐ	井	×	○1
を	遠	○	○
を	越	○	○
ゑ	惠	○	○
ん	无	○	○

世阿弥と禅竹とを比較してみると、次の字母において使用される字母の種類に相違が見られる。

【世阿弥自筆本で使用されず、『五音三曲集』では使用される字母】

- あ(阿) 1…後述するが、複合語「安比阿不」(六オ2)の語中で一例のみ使用されている。
- く(具) 13…「思徒、具流」(二十ウ7)「宇徒久之具」(三十一オ2)など非語頭のみで使用されている。
- け(介) 20…「介不」(四ウ7)、「介不利」(二十一オ3)など語頭や付属語「介利」で頻繁に使用されている。
- け(遣) 6…「也王良遣」(十四ウ5)、「思川、遣」(十七ウ2)など非語頭のみ使用されている。
- け(希) 5…「心地尔」徒希」(一オ7)「可希天」(六ウ5)など動詞の非語頭のみ使用されている。
- さ(佐) 4…「佐多女奈幾」(八ウ2)「佐曾奈」(十一ウ1)など語頭のみ使用されている。
- す(須) 1…「多須計尔天」(三十六オ4)でのみ一例使用されている。
- せ(勢) 1…「秋可勢」(九オ2)「心つくしの秋かせに海はすこしとをけれとも」で一例のみ使用されている。
- つ(津) 1…「興津之良奈三」(五オ4)「聲うちそふる興つしらなみ」の中で一例のみ使用されている。
- と(登) 16…後述するが、「登不」(七オ6)「登字計川」(十六ウ1)など語頭や拍子記載部分で使用される。
- の(農) 3…「月農光」(四オ3)「住吉農」(五オ4)など助詞「の」において使用される。
- は(波) 17…「波可奈起」(二十オ5)「以呂波」(三十四オ1)や付属語「は」と、広く使用されている。
- ひ(飛) 11…「飛良計之」(二ウ5)「飛呂久」(三ウ3)など語頭を中心に非語頭にも使用される。
- ひ(日) 10…「日呂幾」(六オ1)「日可之」(六ウ2)など謡曲の語頭で使用される。
- ら(羅) 5…後述するが「与寸可羅」(二十八オ4)「宇多字羅」(二十二オ8)など非語頭中心に使用される。

る(類) 1…「安類」(一オ5)と非語頭でのみ一例使用されている。

る(井) 1…「御春末井」(四十オ2)と謡曲部分で非語頭一例が使用されている。

【世阿弥自筆本で使用され、『五音三曲集』では使用されな字母】

そ(楚) 2…「左也字尔楚」(七オ4)「遠与楚」(八ウ1)と『花伝第七別紙口伝』で二例のみ使用される。

た(太) 130…「太々之久」(四オ5)「太止比」(四ウ4)など『花伝第六花修』を含む三書で使用される。

に(丹) 4…「以可丹毛」(十オ8)など非語頭の使用が『花伝第六花修』を含む二書で使用される。

ま(万) 32…「春万之幾」(四ウ8)など非語頭を中心に『花伝第六花修』を含む二書で使用される。

め(免) 6…「徒免」(六ウ1)など『花伝第六花修』を含む二書で使用される。

以上のように『五音三曲集』は世阿弥自筆本で使用される字母よりも種類が多く、多様な字母が使用されている。これに対し、世阿弥自筆本は一音一字母の割合が高く、禅竹よりも十七字母少ない。すなわち左記の十七字母が世阿弥の自筆本では使用されていない。

あ(阿) く(具) け(介) け(遣) け(希) さ(佐) す(須) せ(勢)

つ(津) と(登) の(農) は(波) ひ(飛) ひ(日) ら(羅) る(類) ゐ(井)

もっともこのうちの六字母(「あ(阿)」「す(須)」「せ(勢)」「つ(津)」「ゐ(井)」「る(類)」)は用例がそれぞれ一例と少なく、いずれも古歌・謡曲部分に集中しているようにも看取される。

一方、世阿弥自筆本で使用され、『五音三曲集』で使用されなかった字母が次の五字母である。

そ(楚) た(太) に(丹) ま(満) め(免)


このうち、「に(丹)」に関しては他の禅竹自筆本『五音之次第』・『歌舞髓脳記』序部分・『至道要抄』でも使用されておらず、禅竹自筆本に共通する特徴の一つといえる。

三 一音二字母の使用字母の特徴

前節では、同じ禅竹自筆本で、いかなる字母を使用しているか世阿弥と比較しつつ、確認した。本節では、一音に対し、二種類の字母を併用する場合、どのような書き分けの傾向があるか、語の位置別に検討していく。

『五音三曲集』の中で一音節につき二字母の字母を使用するのは以下の二十四である。

あ(安・阿)か(可・加)き(幾・起)く(久・具)こ(己・古)さ(左・佐)し(之・志)
せ(世・勢)た(多・堂)と(止・登)な(奈・那)ね(祢・年)ふ(不・婦)へ(部・遍)
ほ(本・保)ま(末・満)や(也・屋)ら(良・羅)り(利・里)れ(禮・連)ろ(呂・路)
わ(王・和)ゐ(爲・井)を(遠・越)

もっとも、一音二字母でも二種類の字母を均等に使用しているわけではない。『五音三曲集』にみられる二字母を、使用頻度(総数の割合)によって分類したところ、次のように分けられる。【二字母の使用率分類】参照

【分類 A 一字母型】二字母用いられているが極端に一字母に偏るもの 19

(多用字母の使用率が90%以上で少用字母の使用率が10%未満のもの)

あ(安・阿)か(可・加)き(幾・起)く(久・具)さ(左・佐)せ(世・勢)た(多・堂)

と(止・登)な(奈・那)ふ(不・婦)へ(部・遍)ほ(本・保)や(也・屋)ら(良・羅)
 り(利・里)ろ(呂・路)わ(王・和)ゐ(爲・井)を(遠・越)

【分類 B 二字母主従型】二字母のうち一方が60%以上使用されている多用字母 5

(多用字母の使用率が70%以上90%未満で少用字母の使用率が10%以上30%未満のもの)
 こ(己・古)し(之・志)ね(祢・年)ま(末・満)れ(禮・連)

【分類 C 二字母均等型】二字母使用がほぼ同数であるもの || 多用字母がないもの 0

(多用字母の使用率が50%以上70%未満で少用字母の使用率が30%以上50%未満のもの)
 『五音三曲集』には該当する字母が見られなかった。

分類 A の字母を分析した結果、以下の三つの特徴が明らかとなった。

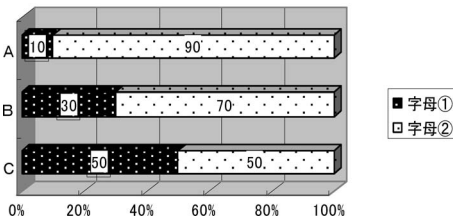
(一) 多用字母は使用率90%以上で、語頭・非語頭の両方で広く使用されている。

あ(安)か(可)き(幾)く(久)さ(左)せ(世)た(多)
 と(止)な(奈)ふ(不)へ(部)ほ(本)や(也)ら(良)
 り(利)ろ(呂)わ(王)ゐ(爲)を(遠)

(二) 使用率10%以下の少用字母は語頭・非語頭のいずれかで使用されることが多く、偏りが見られる。

少用字母が語頭に偏る例 …か(加)さ(佐)た(堂)と(登)や(屋)わ(和)
 少用字母が非語頭に偏る例…あ(阿)き(起)く(具)せ(勢)な(那)ふ(婦)
 ほ(保)ら(羅)り(里)ろ(路)を(越)ゐ(井)

二字母の使用率分類



少用字母が付属語に偏る例：へ（遍）

(三) 少用字母が複合語の後置語基、拍子（鼓の擬音語に基づく）、隣接忌避、連接回避などのために区別を要する部分で使用された可能性が考えられる。

…あ（阿）と（登）た（堂）な（那）さ（佐）ら（羅）等

さらに、分類Bの字母の使用実態を分析した結果、次の特徴が明らかとなった。

(四) 通常、語頭で使用される字母が非語頭に（あるいは非語頭で使用される字母が語頭にと）使用される。例外ともいふべき反対の現象が訂正箇所で見られる。…か（加）し（之）し（志）

以下右の四項について代表的な例を挙げ、詳細に示していくこととする。

まず、(一)の「一方の字母が主用字母で、語頭・非語頭の両方で広く使用されている」ケースとは、分類Aの字母のうち（上側に示した）十九の主用字母のことであり、「あ（安）」を例にとって説明する。

使用率が90%以上を占め、いずれも主用字母といえる。

あ（安）か（可）き（幾）く（久）さ（左）せ（世）た（多）と（止）な（奈）ふ（不）
へ（部）ほ（本）や（也）ら（良）り（良）ろ（呂）わ（王）ゐ（爲）を（遠）

【あ】安212（語頭193・非語頭19）

阿1（語頭0・非語頭1）

禅竹は「あ」の仮名として「安」「阿」の二字母を使用しているが、「あ」が含まれる語、二百十三例のうち二百十二例（全体の九割以上）で「安」が使用されている。

「安女」（あめ・雨） 「安越尔与之」（あをによし） 「安末」（あま・海女） 「安知八以」（あちはい）

「安良之」(あらし・嵐) 「安良八寸」(あらはす) 「安久留」(あくる) 「安王礼武」(あわれむ)

「安」は名詞および動詞の語頭の他に、次のような非語頭にも使用する。

「於之安天」(おしあてゝ) 「末起禮安留」(まぎれある) 「惠无安不」(ゑんあふ・鴛鴦)

以上、「あ」には「安」「阿」の二字母が見られるが、「安」を主用字母として語頭・非語頭と広く使用していることがわかる。⁽³⁾同様のことが先に挙げた十八の主用字母にも該当する。一音二字母のうち、特に主用字母では、語頭・非語頭の両方に使用される傾向が見られる。⁽⁴⁾分類Aは一音二字母であるが「二字母型」と分類したように一字母に偏った傾向が窺える。一音に対し一種類の字母が対応していく、一字母増加という時代的傾向を指し示すものとして捉えられる。

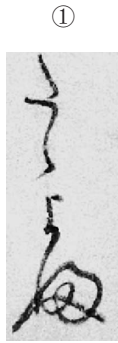
次に十一頁に示した(二)の「少用字母は語頭・非語頭のいずれか一方で使用されることが多く、偏りが見られる」という傾向について「婦」「和」を例に説明する。

【ふ】 不 168 (語頭 47・非語頭 114・付属語 5)

婦 6 (語頭 0・非語頭 6・付属語 0)

禅竹は「ふ」の仮名として「不」「婦」⁽⁵⁾の二字母を使用する。「不」を主用字母として語頭・非語頭に広く使用、少用字母の「婦」は六例全て非語頭で使用しており、偏りが見られる。以下がその具体例である。

「多々婦」(た々よふ)、「天奈良婦」(てならふ)、「毛乃婦」(ものよふ)、「不字婦」(ふうふ)、「奈良婦留」(ならふる)、「いふ」(以婦)と全て動詞および名詞の非語頭に集中する。



①



②



③



④



⑤



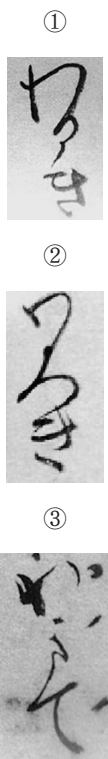
⑥

- ① 多々、与婦心知之天心詞乃外尔影乃字可比（たよふ心ちして心詞の外に影のうかひ）（十ウ6）
- ② 止幾乃天奈良婦者之女奈留部之・志可礼八目尔（ときのでならふはしめなるへし・しかれば目に）（十四ウ4）
- ③ 鬼神遠毛也王良遣毛乃、婦乃心奈久左武留（鬼神をもやわらけものふの心なくさむる）（十四ウ5）
- ④ 不宇婦乃奈左計志留事毛以末身乃宇部尔志良礼（ふうふのなさけしる事もいま身のうへにしられ）（十四ウ6）
- ⑤ 己字計以尔末久良奈良婦留床乃上・奈禮之（こうけいにまくらならふる床の上・なれし）（十六オ9）
- ⑥ 尔以比・堅尔以婦部幾所遠横尔以不八王呂之（にいひ・堅にいふへき所を横にいふはわろし）（三十九オ2）

【わ】 王 85（語頭49・非語頭36・付属語0）

和 3（語頭3・非語頭0・付属語0）

禅竹は「わ」の仮名として「王」「和」の二字母を使用、「王」を主用字母として語頭・非語頭の両方で使用している。他方、もう一方の少用字母「和」は、以下三例で使用しており、いずれも非語頭に集中する。



- ① 名所八左満く於、計連止毛和幾天知可比毛（名所はさまくお、けれどわきてちかひも）（六才6）
 ② 於止寸八入性奈利於止寸可和呂幾曾止以部八（おとすは入性なり・おとすかわろきそといへは）（三十八ウ8）
 ③ 名越發之奴禮止毛其字知尔於幾天毛和留幾（名を發しぬれとも其うちにおきてもわるき）（四十三才4）
- 「和」は、「和留幾」（わるき）、「和呂幾」（わろき）、「和幾天」（わきて）の三例のみと用例数は少なく、いずれも非語頭で偏っている。こうした、十二頁に示した（二）の傾向は「和」以外の少用字母においてもあてはまる。【語頭に偏る傾向】と【非語頭に偏る傾向】【付属語に偏る傾向】の三つに分けたうえで、以下一部用例を挙げる。

【少用字母が語頭に偏る傾向】	（用例・一部）
か（加）三十九例中三十一例が語頭	加羅（から） 加、利（かかり） 加奈之美（かなしみ） 加部之（かへし） 加、禮（かかれ） 加无王字（かんわう） 加无与字（かんよう） 加久之（かくし） 加多（かた） 加計（かけ）
さ（佐）四例中四例が語頭	佐多女（さため） 佐川天（さつて） 佐曾不（さそふ） 佐久（さく）
た（堂）九例中九例が語頭 （但し語頭には拍子記載部分四例を含む）	堂末不（たまふ） 堂毛知（たもち） 堂乃女（たのめ）
と（登）十六例中十例が語頭 （但し語頭には拍子記載部分六例を含む）	登不（とふ） 登左満（とさま） 登宇計川（とうけつ） 登比（とひ） 登登（とと） 拍子記載部分

や(屋) 三例中三例が語頭 (但し非語頭四例を漢字とみなす)	屋止利(やとり) 屋三奈无(やみなん) 屋主良久流(やわらくる)
わ(和) 三例中三例が語頭	和幾天(わきて) 和留幾(わるき)
【小用字母が非語頭に偏る傾向】	(用例・一部)
あ(阿) 一例中一例が非語頭	安比阿不(あひあふ)
き(起) 二十三例中二十三例が非語頭	止利王起(とりわき) 徒与起(つよき)
く(具) 十三例中十三例が非語頭	徒具(つくく) 徒具里(つくり) 左止可具良(さとかくら) 徒具之(つくし) 以徒具(いつく) 宇徒久之具(うつくしく)
せ(勢) 一例中一例が非語頭	秋加勢(秋かせ)
な(那) 四例中一例が非語頭 (残る二例は付属語「かな」)	春久那留(すくなる) 者那(はな)
ふ(婦) 六例中六例が非語頭	多々 _レ 与婦(た _レ よふ) 天奈良婦(てならふ) 毛乃 _レ 婦(もの _レ ふ) 奈良婦留(ならふる) 不宇婦(ふうふ) 以婦(いふ)
ほ(保) 四例中四例が非語頭	於保田留(おほゆる) 於保衣(おほえ) 於保幾(おほき)
ら(羅) 五例中四例が非語頭	加羅(から・唐) 羅字寸以(らうすい) 宇多字羅(うたうら)
り(里) 二十九例中二十三例が非語頭	与里(より) 曾里也久(そりやく) 加 _レ 里(かかり) 曾呂里止(そろりと) 比与久連无里(ひよくれんり)
ろ(路) 六例中六例が非語頭	古 _レ 路(こころ) 以路(いろ) 於毛 _レ 之路幾(おもしろき)

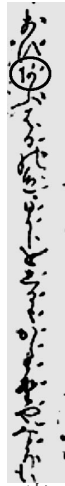
る(井) 一例中一例が非語頭 を(越) 六例中五例が非語頭 (残る一例は付属語 助詞「を」)	御春末井(御すまる) 奈越之(なをし) 止越介禮(とをけれ) 安越尔与之(あをによし)
--	--

【少用字母が付属語に偏る傾向】	(用例・一部)
へ(遍) 八例中五例が付属語	遍之(べし) 遍幾(べき)

さらに、十二頁に示した(三)の「少用字母が、複合語の後置語基、拍子記載部分、隣接忌避、連接回避など何らかの区別を要する部分で使用された可能性が考えられる。」という点について分類Aから最も特徴的なものを以下挙げる。

(ア) 複合語の後置語基

『五首三曲集』では、複合語が数多く見られ、それら全てが少用字母をもって書かれるわけではないが少用字母が使用された箇所をたどっていくと、複合語の例が散見する。(なお今回は、複合語として認められるかは、『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五年)を参照しつつ、採録を行った。一語の範囲や当時の語構成に対する意識に添うものか等、分析上、語の捉え方が問題となる箇所で、この点に関しては、第四節で詳しく後述する。)そもそも禅竹は「あ」の仮名として「安」「阿」を使用している。「あ」が含まれる語は二百十二例を数えるが、このうち「阿」を使用するのは、ただ一例のみである。左図版の箇所(六ウ2)がその一例で、非語頭に偏って使用している。複合動詞「あひあふ」の後置語基で使用している。

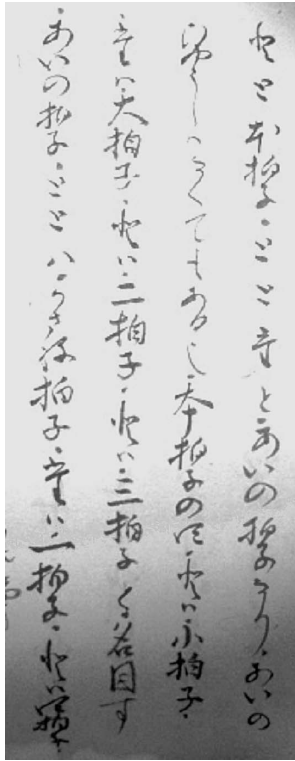


安比阿不者留能色日可之遠志留毛加之末野也美止利毛

(あひあふはるの色ひかしをしるもかしま野やみとりも)

(イ) 鼓の擬音に拠る拍子記載部分

『五音三曲集』左図版(三十七丁裏一〜四行)では鼓の擬音に基づき拍子を記載する。



- 1 登止本拍子・止止堂止・安以乃拍子奈利・安以乃
(とと本拍子・とたと・あいの拍子なり・あいの)
- 2 比也宇之八奈久天毛安留也・本拍子乃四・登八・小拍子 (ひやうしはなくともある也・本拍子の四とは小拍子)
- 3 堂八・大拍子・登八・二拍子・登八・三拍子止・名目寸(たは・大拍子・とは・二拍子・とは・三拍子と名目寸)
- 4 安以乃拍子・止止八・可左祢拍子・堂八・一拍子・登八四拍子

(あいの拍子・ととはかさね拍子・たは一拍子・とは四拍子)

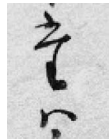
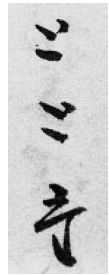
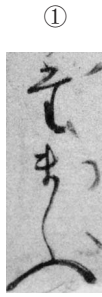
ここで注目されるのは「た(堂)」と「と(登)」という字母である。それぞれの字母についてみていく。

【た】 多310 (語頭126・非語頭155・付属語29)

堂9 (語頭9・非語頭0・付属語0) (但し語頭には拍子記載4例を含む)

まず、禪竹は「た」の仮名として「多」「堂」の二字母を使用、「太」は使用していない。「多」は三百十例と多く、「た」しかに「たとひ」、「はたらき」「さため」など語頭・非語頭の両方に使用されている。

一方の「堂」は、九例と限られており、少用字母にあたる。「堂」の用例は補助動詞「堂末不」(たまふ)で二例、「堂毛知」(たもち)「堂乃女」(たのめ)といった動詞の語頭で使用されているほか、副詞「たゞ」で一例、拍子記載部分「堂」(た)で四例使用されている。「堂」は、語頭に集中して使用されているといえる。具体的な箇所は次の通りである。(②③⑧は、行頭での使用。／は改行を表す。)



① 御心尔天正直乃可宇部尔屋止利堂末部

(御心にて正直のかうへにやとりたまへ)

(三ウ6)

② 堂末不御女久三・計尔安利可多也王禮良己止幾乃 (たまふ御めぐみけにありかたやわれらこときの) (三ウ8)

- ③ 堂毛知給不己止寸部天八三六八〇〇餘歳奈利 (たもち給うことすべて八三六八〇〇餘歳なり) (五ウ4)
- ④ 地主権現乃花能色毛己止奈利・多々堂乃女 (地主権現の花の色もことなり・た々の女) (十一ウ5)
- ⑤ 止越尔奈利者奈波多俗尔以天奴天以堂心尔 (とをになりはなはた俗にいてぬていた心に) (二十三オ6)
- ⑥ 八拍子奈利本拍子四安以乃拍子四奈利・登堂 (八拍子なり本拍子四あいの拍子四なり・とた) (三十七オ8)
- ⑦ 登止本拍子止止堂止安以乃拍子奈利・安以乃 (とと本拍子・ととたあいの拍子なり・あいの) (三十七ウ1)
- ⑧ 堂八大拍子登八二拍子登八三拍子止名目寸 (たは大拍子とは二拍子とは三拍子と名目寸) (三十七ウ3)
- ⑨ 拍子止止八可左祢拍子堂八一拍子登八四拍子 (拍子とはかさね拍子たは一拍子とは四拍子) (三十七ウ4)
- もっとも「たのむ」や(副詞の)「た」という語は「堂」のみならず、「多」で書いた箇所も見られる。語によって「多」「堂」を書き分けた可能性は低い。(「たまふ」「たもつ」については「多」は看取されない。)
- 同じ表記の「た」でも太鼓の音を表す拍子に関しては全て「堂」で書かれ、一貫している。異なる意味の副詞「たゞ」に関しては、一例をのぞき(二十三オ6)、全て「多」で記している。用例数は限られているが「堂」と「多」を書き分けている可能性が高い。三十七丁裏で拍子記載として使用されていた、もう一つの字母「登」についても見ていく。

【と】 止395 (語頭43・非語頭175・付属語177)

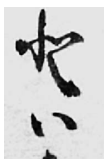
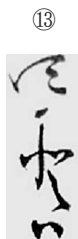
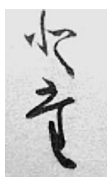
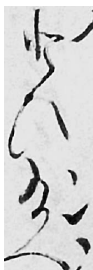
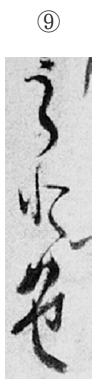
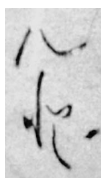
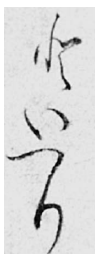
登16 (語頭11・非語頭1・付属語4) (但し語頭には拍子記載六例を含む)

禅竹は「と」の仮名として「止」「登」の二字母を使用している。「止」は全体の九割以上を占め、語頭、非語頭、付属語と広く主用字母として使用している。特に「本止」(ほと・程)、「己止」(こと)、「於止」(おと)といった語尾は

全て「止」で記されている。これに対し、「登」は語頭中心に使用、非語頭は「能／登計幾」(のどけき)一例(用例⑥(行頭))のみである。

「登」が使用されている箇所から特徴をとらえると、大きく分けて三つに類別することができる。

- (1) 格助詞「と」(用例①②③④)
 - (2) 用言や体言の語頭(用例⑤⑦⑧⑨⑩) および非語頭(行頭)(用例⑥)
 - (3) 「ととたた」といった拍子記載(用例⑪⑫⑬⑭⑮⑯)
- 以下「登」が使用された具体的箇所である。



- ① 曾禮申樂舞歌能音曲習道登者・和歌遠（それ申樂舞歌の音曲習道とは・和歌を）（一〇一）
- ② 古、路尔安類遠志登|以比・己止葉尔（こゝろにあるを志といひ・こと葉に）（一〇五）
- ③ 登|以部利・此安樂音乃字性寸久尔多、志久（といへり・此安樂音の字性すくにたゞしく）（二〇三）
- ④ 良无登・南乃山尔春武月農光毛美衣乃・己呂毛天（らんと・南の山にすむ月の光もみえの・ころもで）（四〇三）
- ⑤ 思不事奈止登不人乃奈可良无安不計八（思ふ事なととふ人のなからんあふけは）（七〇六）
- ⑥ 能／登計幾可計八在明乃天毛花尔患、里也（の／とけきかけは在明の天も花にゑりや）（十二〇二）
- ⑦ 滿己止之可良奴事遠多、登左滿可宇左滿尔（まことしからぬ事をたゝとさまかうさまに）（十五〇六）
- ⑧ 不寸末乃与寸可良毛登|宇計川乃跡由女毛奈之（ふすまのよすからもとうけつ跡ゆめもなし）（十六ウ一）
- ⑨ 宇良登|八世給部也宇多字羅止八世（うらとはせ給へやうたうらとはせ）（二十一ウ九）
- ⑩ 以世也日宇可能事毛登|比給部（いせや日うかの事もとひ給へ）（二十三オ三）
- ⑪ 八拍子奈利・本拍子四・安以乃拍子四奈利・登堂（八拍子なり・本拍子四・あいの拍子四なり・とた）（三十七オ八）
- ⑫ 登|止本拍子・止止堂止・安以乃拍子奈利・安以乃（とと本拍子・ととたと・あいの拍子なり・あいの）（三十七ウ一）
- ⑬ 奈久天毛安留也・本拍子乃四・登八・小拍子（なくてもある也・本拍子の四・とは・小拍子）（三十七ウ二）
- ⑭ 堂八・大拍子・登八・二拍子・登八・三拍子止（たは・大拍子・とは・二拍子・とは・三拍子と）（三十七ウ三）
- ⑮ 堂八・大拍子・登八・二拍子・登八・三拍子止（たは・大拍子・とは・二拍子・とは・三拍子と）（三十七ウ三）

⑩ 止止八・可左祢拍子・堂八・一拍子・登八四拍子（とは・かさね拍子・たは・一拍子・とは四拍子）
（三十七ウ3）

（三十七ウ4）

もっとも、「登」が使用された箇所（1）（2）（3）に該当する「と」に対し、「止」が当てられる例がないわけではない。すなわち、格助詞「と」や動詞「とふ」の語頭、および拍子記載「と」が「止」で記される箇所もまた存在する。但し、（3）の拍子記載が頻繁に使用される三十七丁裏を見ても「止」「登」の両方を使用することで拍子記載部分と格助詞「と」の両者を区別し、「た（堂）」同様、書き分けようとする意識が看取される。

（ウ） 隣接忌避

（三）の少用字母の偏りの要因として隣接忌避⁶が考えられる場合について「な」を例に説明を続ける。

次の箇所（用例①三オ1・2）では、「な」が隣接し、右に「那」と異なる字母が使用されている。

奈良能葉毛利乃神心くす恵久良可良奴都路乃（ならの葉もりの神心くすゑくらからぬ都路の）（三オ1）

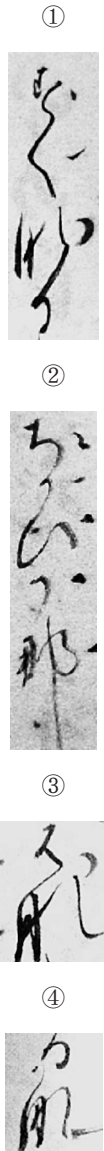
春久那留遍幾可口寸 可八良也伏見乃里能宮作（すくなるへきか すかはらや伏見の里の宮作）（三オ2）

【な】 奈459（語頭125・非語頭135・付属語199）

那4（語頭0・非語頭2・付属語2）

そもそも禅竹は「な」の仮名として「奈」「那」を使用する。主用仮名として「奈」を語頭・非語頭・付属語と広く使用する一方で少用字母「那」は四例と用例数が限られている。以下のように「春久那留」（すくなる）、「者那」（はな）、

「可那」(かな)といった非語頭および付属語で使用されている。



① 春久那留遍幾可寸可八良也伏見乃里能宮作(すくなるへきかすかはらや伏見の里の宮作)(三オ2)

② 可奈 計尔安左可良奴知可比可那(かな けにあさからぬちかひかな)(四ウ4)

③ 左久也・己乃者那止左可部給介留・仁徳天皇止(さくや・このはなとさかへ給ける・仁徳天皇と)(十四オ9)

④ 岡能不可幾山路止成二介留可那(岡のふかき山路と成にけるかな)(十五ウ7)

このうち、隣接忌避が考えられる箇所が先に挙げた用例①と用例③である。用例③もまた右隣に次のようにあり、異字母「奈」に対し隣接忌避を起こし、少用字母「那」を使用した可能性が考えられる。

可部利徒連奈可利介留以能知可奈・左礼八可宇止尔於止呂衣天身遠

(かへりつれなかりけるいのちかな・されはかほとにおとろへて身を)(十四オ8)

隣接忌避だと捉えられる箇所について具体的にもう一例、「佐」を例に挙げておく。『五音三曲集』(用例② 二十オ3 行目・4行目)では、次のように「さ」が左右に並ぶ箇所が存在する。

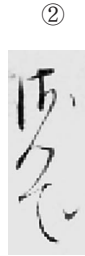
左无之葉於川時宇川利所遍无之天・多乃之三寸天尔(さんし葉おつ時うつり所へんして・たのしみすてに)

佐川天加奈之美者也久幾多禮利・安左可本乃 (さつてかなしみはやくきたれり・あさかほの)

【さ】 左164(語頭73・非語頭80・付属語11)

佐 4 (語頭 4・非語頭 0・付属語 0)

そもそも禅竹は、「さ」の仮名として「左」「佐」を使用する。主用字母「左」については語頭・非語頭と多く使用するも少用字母「佐」は、全て動詞の語頭で使用されている。具体的に「佐」が使用されたのは以下の四例である。



- ① 幾古由禮止毛嵐八以徒具止毛佐多女奈幾世乃夢(きこゆれとも嵐はいくつとも・さためなき世の夢)(八ウ2)
 - ② 佐川天加奈之美者也久幾多禮利・安左可本乃(さつてかなしみはやくきたれり・あさかほの)(二十オ4)
 - ③ 徒連天知留也古・呂奈留良无佐曾不名尔之本不(つれてちるやくころなるらんさそふ名にしほふ)(十一ウ1)
 - ④ 末川春八梅左久良佐久与利知留末天毛雪(まつ春は梅さくらさくよりちるまでも雪)(十二オ7)
- 隣接忌避が考えられるのは先に挙げた用例②「佐川天」(さつて)と用例③である。(残る用例は連接回避の可能性が考えられる。)少用字母が使用された要因として隣接忌避が考えられる箇所は、右に挙げた「那」「佐」以外にも少なからず採録されている。

(ウ) 連接回避

少用字母の使用の偏りの要因として連接回避⁸⁾が考えられる箇所について「ら」を例に挙げる。

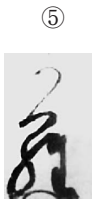
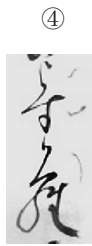
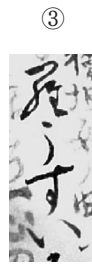
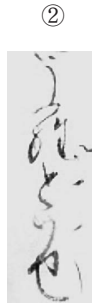
【ら】 良184 (語頭 3・非語頭 162・付属語 19)

羅 5 (語頭 1・非語頭 4・付属語 0)

禅竹は「ら」の仮名として「良」「羅」の二字母を使用している。「良」は「良无可无」(らんかん)、「良里留禮呂」(ら

りるれるろ)、「良」无拍子(らん拍子)など語頭に使用されるほか、非語頭、付属語にも使用する。

一方、少用字母の「羅」は五例と用例は少なく、一例を除き非語頭で使用している。以下が具体例である。接続回避ととらえられるのが用例②の箇所である。



用例②は謡曲「歌占」の下歌部分で「うら」とはせ給へや うたうらとはせ給へや」と類似した語句が繰り返される部分である。同行の上部に同音異字母で「宇良」と書かれており、下の「うら」では「宇羅」と少用字母の「羅」を使用、接続回避の可能性が考えられる(左図版参照)。



(安留妙文奈利) 宇良登八世給部也宇多字羅止八世(二二二ウ9)

(ある妙文なり) うらとはせ給へやうたうらとはせ

最後に十二頁に示した(四)の「通常、語頭に偏って使用される字母が非語頭に(あるいは非語頭で使用される字母が語頭に使用されるなど)例外ともいうべき反対の現象が訂正箇所で見られる。」について具体的に示す。

『五音三曲集』では訂正箇所が少なからず散見される。もともと記された字母に対し、その上から重ね書きすることで削除する重ね字の場合や、墨消をしたうえで右傍に訂正語句を書く見消の場合など幾つかの訂正方法が見られる。

訂正のために使用された字母を見ていくと、(語頭専用と思われる字母を非語頭に使用するなど)本文の字母傾向と異なる使用が見られる。訂正箇所を独立した「語」と捉えているためか、重ね字をするために字体の大きい字母を選択したのか。具体的に、「か(加)」を例に(四)の特徴について検討していく。

【か】 可 480 (語頭90・非語頭342・付属語48)

加 34 (語頭32・非語頭1・付属語1)

禅竹は「か」の仮名として「可」「加」を使用する。「可」は語頭・非語頭の両方に広く使用されており、主用字母と位置づけられる。他方、もう一方の字母「加」は三十四例あるが、使用率は全体の二割と「可」に比べ、少なく、少用字母に位置づけられる。「加」は二例(付属語の「か」・「連字加无」(れうかん・龍顔))を除き、全て語頭で使用されており、使用位置に偏りが見られる。

その少用字母「加」が語頭以外に使用されたのが次の図版の箇所(五オ8)である。もともと「ことゝかや」と書かれていた箇所を朱で抹消、右傍に「加止与」(かとよ)と訂正する。「加」は助詞「か」にあたり、非語頭に該当する。なお図版本文の右側に付された朱点は全て節付である。)

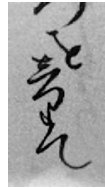


(ことゝかや) (朱)

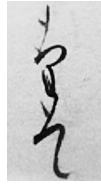
通常は「加」を語頭に使用するも、右の訂正箇所では非語頭に使われ、異なる傾向が見られる。もっとも通常とは異なる使用傾向と書いたが、「かとよ」を独立した一語と解すると「加」が語頭で使用された格好になっている箇所もある。次に、別の訂正箇所である「し」(衍字)について取り上げる。¹⁰⁾

次の訂正箇所では「之」が使用されている。一行前（三行目）に「志里天」と書くも改行後、誤って再度同じ語を書いてしまう。所謂、衍字である。四行目行頭に誤って書かれた側に少用字母「之」が使用されている。「之里天」の字体の上から訂正の印（右下がり斜めの点が四つ）が打たれているのが図版からわかる。

能无止 安幾 志多奈止尔天其字、遠 王可川遠志里天（のんどあき したなどにて其字、をわかつをしりて）
之里天字幾く止以不部之多止部八幾者尔天以不字遠（しりてうきくといふへしたとへはきはにていふ字を）



三十四オ3 「志里天」(しりて)



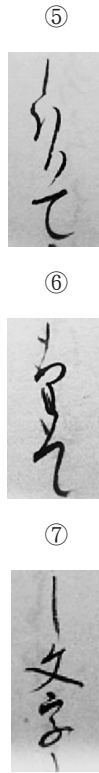
三十四オ4・行頭「之里天」(しりて)

【し】 之378（語頭14・非語頭267・付属語97）

志105（語頭83・非語頭20・付属語2）

禅竹は「し」の仮名として「之」「志」の二字母を使用する。分類Bに属する「し」は「之」「志」それぞれ用例数をもち、語頭・非語頭・付属語と広く使用するが、「志」を語頭に、「之」を非語頭・付属語にと偏りが見られる。具体的に「志」は「志乃不」（しのふ）、「志可毛」（しかも）、「志本久三」（しほくみ）といった語頭に使用されることが多い。これに対し、「之」は「安良八之」（あらはし）、「天良之」（てらし）、「以多之」（いだし）、「奈久之」（なくし）といった非語頭で使用されているのである。

こうした傾向とは反対の使用傾向（「之」を語頭に、「志」を非語頭に使用）を概観すると、先に挙げた訂正箇所を含む「之」の語頭例（十四例）が看取される。代表的な例を図版で掲げる。



さらに非語頭に使用した「志」について、代表的な例を一部示すと次のような箇所が挙げられる。



比、幾川、安計奈无止之天別遠毛与本寸・世（右傍）（ひゝきつゝあけなんとして別をもよほす・せ）（右傍）（十六オ五）

用例⑧もまた訂正箇所（見消部分）の一つである。もともと「毛与本春」（もよほす）と書いていたが、「もよほし」と訂正するため「す（春）」を墨消し、右傍に「し（志）」と書き添えている。「もよほし」は非語頭（語尾）であたるので「し（之）」が使用されることが多いのだが、ここでは、節付や注記類に紛れることのないようにするため、字体の大きい「志」が使用されたのだろうか。訂正箇所異なる字母傾向が見られる例の一つである。

以上、ここまで一音に対して二種類の字母が使用される一音二字母の場合に焦点をあて、使用比率で分類したうえ、その特徴を具体的に見てきた。分類Aは、主用字母の使用率が90%以上と極端に多く、一字母に偏るタイプで、十九

の字母が採録している。重複するが、特徴として以下のようなものが挙げられる。

分類Aの字母を分析した結果、以下の三つの特徴が明らかとなった。

(一) 主用字母は使用率90%以上で、語頭・非語頭の両方で広く使用されている。

あ(安)か(可)き(幾)く(久)さ(左)せ(世)た(多)と(止)
な(奈)ふ(不)へ(部)ほ(本)や(也)ら(良)り(利)ろ(呂)
わ(王)ゐ(爲)を(遠)

(二) 使用率10%以下の側の少用字母は語頭・非語頭のいずれかで使用されることが多く、偏りが見られる。

少用字母が語頭に偏る傾向 …か(加)さ(佐)た(堂)と(登)や(屋)わ(和)
少用字母が非語頭に偏る傾向…あ(阿)く(具)せ(勢)な(那)ふ(婦)ほ(保)
ら(羅)り(里)ろ(路)を(越)ゐ(井)

少用字母が付属語に偏る傾向…へ(遍)

(三) 少用字母があえて使用された要因を考えた場合、複合語の後置語基、拍子記載部分、隣接忌避、連接回避など区別を要する部分で使用された可能性が考えられる。

…あ(阿)と(登)た(堂)な(那)さ(佐)ら(羅)等

さらに、それぞれ用例数を持つ分類Bの字母を分析した結果、次の特徴が明らかとなった。

(四) 通常、語頭で使用される字母が非語頭に(あるいは非語頭で使用される字母が語頭に)と 例外ともいうべき反対の使用現象が訂正箇所で見られる。…か(加)し(之)し(志)

(分類Bのうち、偏りの少ない「ま」や語頭そのものの例が少ない「れ」は除外した。)

四 禅竹の語意識と字母の語頭表示機能の関わり

禅竹筆『五音三曲集』は世阿弥自筆本（『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』『金春大夫宛書状』）の平仮名資料に比べ、漢字の使用割合が高い点は異なるが、仮名が多用されている点で共通する。仮名で記された語を区切り、分かち書きが施されているほか、語の意味が取りやすいように、句読点、濁点、振り仮名、注記など、様々な工夫がなされている。その判読の補助的機能の一つとして考えられるのが字母による語頭表示である。¹²⁾

第三節までに、禅竹は語頭・非語頭の両方で使用する字母以外に、語頭、非語頭のいずれかに偏る字母が存在すると述べた。世阿弥ほどではないが、これらの字母のうち、幾つかは語頭専用、非語頭専用ともいえるべき使用傾向が存在する。今回、語の分析にあたり、細かく形態素で分割するのではなく、複合語を認める形で採録にあたった。一語としての範囲まで認めるのか、あるいは当時一語としての範囲まで認められていたのかについては分析するうえで慎重に検討すべき問題である。分析上、複合語として大きく括ると非語頭に含まれるが、二語として細かく区切れば語頭の用例にあたるように、採録方法によって語頭・非語頭の使用数が左右されてしまう。

ここではむしろ、語頭専用と思われる字母がどこに使用されたのか、使用位置に着目していくことで、禅竹自身が何処までを一語と捉えていたのかを考える一つの手がかりとなると思われる。例えば次のような場合である。

しほ 之本一例 「出_レ本」 (出しほ) (九ウ2)

志本三例 「志本久三(しほくみ) (九オ7)」「志本久三(しほくみ) (三十オ4)

「志本」 (しほ) (三十オ5)

禅竹は、「しほ(潮)」という意味の語において全て「志本」と表記する。その唯一の例外ともいえる箇所が「出潮

(いでしほ)「という複合語である。謡曲「松風」の引用で、月の出とともに満ちてくる潮を意味し、節付から「でしほ」と読ませていたことが分かる。

そもそも禅竹は「し」の仮名として「志」と「之」を使用、両字母とも語頭・非語頭に使用するが「志」を語頭に、「之」は非語頭に多く使用する傾向が看取される。禅竹が「出しほ」に対し、「志」ではなく「之」を使用したのは「出しほ」という複合語を一語でとらえていたと解釈できよう。一方、次のように二語に分けて捉えていると思われる例も散見する。(濁点は原文に付されている場合に限り、括弧内に示した。)

した 之多○例 「した(下)」の意味の語に対しては用例なし

志多三例 「安女可／志多」(あめか／した) (七オ7・8)

「不寸末乃志多」(ふすまのした) (二十四オ5)

「苔乃／志多」(苔の／した) (二十九オ7・8)

和語(複合語)の非語頭で語頭専用とも思われる「志」が使用されている。

禅竹は、「した(下)」の意味の語は、一貫して「志多」と記している。それは複合語や連体修飾語がついた場合も同様で、複合語を一語として捉えず、「した(下)」を敢えて区切って捉えているようである。

さらに、和語以外に、漢語において「志」を語中で使用した例が見られる。次の漢語では二語目先頭に「志」を使用、語頭に準じて使用しているように看取される箇所で、二語を区別しているように捉えられる。

奈宇志由 (なうじゆ・納受) (一オ3)

志无志也宇不志也宇 (しんしやうふしやう・真性不性) (三ウ5)

花幾无志也宇 (はきんしやう・花琴上) (十六オ3)

字无志也字 (うんじやう・雲上) (二十一オ7)

武志也字 (むじやう・無常) (二十一ウ8)

里不志无 (りふしん・李夫人) (二十一オ5・二十一ウ3)

末字志字 (まうしう・妄執) (三十二ウ7)

安比志字 (あひしう・愛執) (三十二ウ8)

良无志也字 (らんじやう・乱聲) (三十七ウ5 振り仮名部分)

もっとも漢語の二字目で「之」が使用される例がないわけではない。例えば次のように非語頭でも使用されている。

志也字之知也字也 (しやうしちやうや・生死長夜) (二十二オ1)

仏法左以之与 (仏法さいしよ・仏法最初) (二十四ウ8)

安比之字 (あひしう・愛執) (三十二ウ4)

比也字之 (ひやうし・拍子) (三十七ウ2・三十八ウ3・四十三ウ10・11)

以上のような反例もまた確認されるが、「志」に比べると非常に少ない。「志也字之知也字也」や「仏法左以之与」は「志也字之 知也字也」「仏法 左以之与」のように分かち書きしているように見え、四字漢語のうち、前二字、後ろ二字を分けることで語のまとまりをもたせ、二字漢語内では「志」を使用しなかった可能性が考えられる。このように禅竹筆『五音三曲集』では、全てではないが複合語および二字の仮名書き漢語の二語目先頭に、語頭専用とも思われる字母「志」が使用されている特徴が挙げられる。同様の傾向が世阿弥でも顕著に表れており、表・後藤(一九八〇)および拙稿(二〇〇八)にも指摘がある。拙稿より世阿弥の「し」について一部補足したうえで引用する。

世阿弥は禅竹同様、「し」の仮名として「志」「之」を使用するが「之」を九割と多用、「志」は自立語語頭で(96%)、

「し(之)」は非語頭および「べし」など付属語に使用が集中する。反対に、語頭専用ともみえる「志」を非語頭に用いた例もまた以下の漢語四例で見られる。

太川志也 (たつしや・達者)

志无志川 (しんじつ・真実)

加字志与久 (かうじよく・好色)

己志川 (こしつ・故実)

表・後藤氏の先行研究にも指摘があるが、いずれも漢語二字から成る語であり、「志」が語中(二字目の語頭)で用いられている。もっとも全体から見ると「之」の使用例は全体に多く、語中に「之」を使用することも多い。即ち、二字漢語に必ず「志」を用いるとまではいえない。以下反例の「之」の漢語使用例である。

左之幾 (ざしき・座敷) 計无不川之由 (けんふつしゆ・見物衆) 二例

天无之也 (でんじや・田舎) 志也字之由 (しやうしゆ・成就) 志与之 (しよじ・諸事)

多川之也 (たつしや・達者) 二例 左久之也 (さくしや・作者) 六例

世阿弥筆『花伝第六花修』の書写年は応永年間(一三九四〜一四二八)、禅竹筆『五音三曲集』の書写年は長禄四年(一四六〇)と言われており、書写年に開きがあるが、少なくとも異なる自筆本において共通した傾向が見られる。禅竹に限らず、他の諸本においても見られる可能性があり、当時の漢語認識にかかわる問題として今後、さらなる調査をおこなっていきたい。

五 ま と め

以上、本稿では、金春禅竹自筆『五音三曲集』を対象に禅竹がどのような平仮名字母を使用しているのか、分析してきた。結論をまとめると以下ようになる。まず、字母の種類は九十三種類、一音に対応する形にすると、以下のような如くである。(百分率については、小数点第一位を四捨五入した。)

一音一字母 (一音につき字母一種類を使用するもの)	15 / 48音 (31%)
一音二字母 (一音につき字母二種類を使用するもの)	24 / 48音 (50%)
一音三字母 (一音につき字母三種類を使用するもの)	7 / 48音 (15%)
一音四字母 (一音につき字母四種類を使用するもの)	1 / 48音 (2%)
一音五字母 (一音につき字母五種類を使用するもの)	1 / 48音 (2%)

この結果を世阿弥の自筆本(『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』『金春禅竹宛書状』)に残された平仮名と比較してみると、次のような特徴が明らかとなった。

(一) 禅竹自筆『五音三曲集』は世阿弥自筆本に比べ、一音一字母の割合が低く、世阿弥の使用していなかった十七字母を使用している。

(二) 禅竹自筆『五音三曲集』は世阿弥自筆本で使用されている字母のうち、使用しない字母が五字母存在した。

この五字母のうち、「に(丹)」に関しては他の禅竹自筆本(『五音之次第』『歌舞髓脳記』『至道要抄』)でも使用がなく、禅竹の用字法の特徴の一つといえる。

一音に対し二種類の字母を併用する場合に焦点をあて、その使用比率で分類した結果、次の特徴が明らかとなった。

(三) 二字母用いているが極端に一字母に使用の偏りが見られる分類Aでは、使用率90%以上を占める主用字母が、語頭・非語頭の両方で広く使用されている。

(四) 分類Aのうち、使用率10%以下の少用字母は語頭・非語頭のいずれかで使用しており、偏りが見られる。

少用字母が語頭に偏る傾向 …か(加)さ(佐)た(堂)と(登)や(屋)わ(和)

少用字母が非語頭に偏る傾向…あ(阿)き(起)く(具)せ(勢)な(那)ふ(婦)

ほ(保)ら(羅)り(里)ろ(路)を(越)ゐ(井)

少用字母が付属語に偏る傾向…へ(遍)

(五) 少用字母があえて使用された要因を考えた場合、複合語の後置語基、拍子記載部分、隣接忌避、連接回避など、何らかの区別を要する部分で使用した可能性が考えられる。一部代表的な例を示した。

さらに二字母それぞれが用例数をもつ、分類Bの字母を分析した結果、次の特徴が明らかとなった。

(六) 通常、語頭で使用される字母が非語頭に(あるいは非語頭に使用される字母が語頭に)使用されるなど、例外ともいべき反対の使用が訂正箇所で見られる。代表的例を一部示した。

最後に第四節では、複合語採録にあたっての問題点を提示した。今回は複合語を採録してきたが、一語としてどの範囲まで認めるのか、あるいは当時一語としてどの範囲まで認められていたのかについては慎重に検討すべき課題である。語頭専用の使用傾向が窺える「志」の使用位置に注目、特に複合語・二字漢語の語中で使用されている例に注目した。禅竹自身がどの範囲までを一語と捉えていたのかを推察する一つの手がかりになるものと思われ、今後他の

字母も含め、慎重に検討していきたい。

【注】

- (1) 表章・後藤ゆう子「世阿弥の平仮名書の用字法の特徴」(上・下)「
『能楽研究』第五号・第六号 一九八〇年・一九八一年 法政大学能楽研究所)
- (2) 資料の書誌、成立年時については『金春古伝書集成』(表章・伊藤止義)(わんや書店 一九六九年)を参考とした。
- (3) 分類Aの主用字母は基本的に語頭・非語頭の両方で使用される。但し、そもそも語頭例・非語頭例が0例(「ゐ」「ろ」)もしくは一例(「れ」)のために十分な用例数が認められないものも存在する。
- (4) これらの字母の多くは他の資料においても語頭・非語頭の両方に使用されているとの報告があり、共通する。また位置による文字遣について書かれた文献『和歌大綱』(著者・成立年は不明、鎌倉時代末期とも言われる)と比較した場合、分類Aの、あ(安)か(可)こ(己)さ(左)し(之)た(多)と(止)ふ(不)へ(部)が「上下わかぬ」で一致、語頭・非語頭の両方で使用する記載がある。
- (5) 禅竹以外の用字法と比べてみると「婦」はあまり使用されておらず、共通性は見出し難い。例えば世阿弥は「婦」を一例使用するも(『花伝第七別紙口伝』最終丁)「ふたつ」と語頭での使用で禅竹とは異なる。当時一般においても稀少字母の一つといえようか。
- (6) 隣接忌避に関しては、その範囲が問題となるが、今回は小松英雄「藤原定家の文字づかい―を』『お』の中和を中心として」(『言語生活』二七二号 筑摩書房 一九七四年)の次の定義を参考に、左右の近接して隣り合う異字母に関して採録した。「定家筆の諸本をつうじて、同字形の隣接を回避するという顕著な傾向が認められる。
基本字形― 特別の制約が加わらない場合に用いられる字形。現行の平仮名に一致するものも少なくない。
補助字形― 同一の字形の隣接を避けるなど、主として視覚的变化を与える目的で用いられる字形。基本字形との差異をきわ立たせるために、それと別字源の、しかも正体の漢字に似そふものも多く用いられている。」
- (7) 用例②④では 付属語「かな」と語尾で「那」が使用されており、それぞれ、行末および行頭に位置する。付属語「かな」は「奈」で書かれることもあり、「那」を専用に書く語ではないようである。

(8) 接続回避は、加藤氏の定義、「上下の文節で対比的表現」に倣う。加藤良徳「機能面からは説明のつかない異体仮名の用法について」『名古屋大学国語国文学』九十五 二〇〇四年

(9) 『国文学研究資料館影印叢書2』解題(樹下文隆氏)では『五音三曲集』の訂正箇所に関し、次のように述べる。「長大なサシ挿入が全て朱であることから本書は、まず本文を墨書し、次に朱で節付や区切り点を付しつつ、増補・訂正も朱で加えていったものと考えられる。(中略)「正歟」や「かきらす歟」など禪竹自身の訂正にしてはやや不自然と思われる表現もある。」すなわち、本文(墨書)、訂正箇所(朱書)は共に同筆とするも執筆時期は同時でなかった可能性があること、同筆か疑問の残る箇所もあると問題提起のみに留めている。

本稿では、こうした事情を加味し、本文を分析の対象とし、基本的に注記類は分析の対象から外した。本文に加えられた訂正箇所については別に取扱い、異なる字母傾向について報告した。慎重に調査していきたい。

(10) 「し」の場合は合計数で見ると「志」が少用字母にあたるが、それぞれに用例数をもつ。三つ目の特徴、「偏りの要因を考えた場合、訂正箇所など何らかの区別を要する部分で主用字母ではなく少用字母が使用された可能性が考えられる。」を説明するためには「志」のみを挙げれば十分であるが、訂正箇所において通常非語頭に使用される「之」が語頭で使用される例が採録されており、「之」の例も挙げておく。

(11) 用例⑨は、謡曲からの引用箇所で助詞「し」(過去「き」の活用形)に対し、「志」が使用された例である。

(12) 語頭表示機能については伊坂氏をはじめとする先行研究において報告がある。伊坂淳一「藤原俊成の用字法・試論」『廣田杜歌合』における機能的用字法―(I) (II) (『学苑』五七七・五七八 一九八八年)

〔付記〕

本稿では『五音三曲集』における用字法を中心に分析した。謡曲や引用との関係や漢語二字目に使用される要因については、さらに考察をすすめる必要がある、今後、別稿に譲るものとする。

本稿の掲載写真は、『金春禪竹自筆能楽伝書 国文学研究資料館影印叢書2』(汲古書院 一九九七年)から掲載した。紙面の都合上、用例のうち、一文全ては入れられない箇所があったが、該当する字母が含まれる形で掲載してある。

(東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍)

キーワード

金春禅竹、『五音三曲集』、平仮名、字母、用字法、隣接忌避、連接回避